

内容外在主義と媒体外在主義

呉羽 真

序論

心理学の歴史はしばしば二つの主要な伝統に区別されると考えられている(cf. Fodor, 1980)。一つはデカルトに帰せられる「合理主義的心理学」であり、これによれば心は外的環境と切り離して研究することができる。もう一つはジェイムズを典型とする「自然主義的心理学」であり、この立場によれば、心理学は生物学の一分野であり、生物は環境への適応によって特徴づけられるから、生物の心を環境から切り離して研究するべきではない。

伝統的心理学におけるこれら二つの立場は、現代の心の哲学においては、心的状態に関する「内在主義」と「外在主義」として対比されてきた⁽¹⁾。心的状態に関する内在主義とは、ある個体の心的状態はその個体の内的状態のみによって個別化(individuate)される、というテーゼである⁽²⁾。現代の認知心理学、特に心を脳に実装された一種のコンピューター・プログラムと見なす計算主義心理学を擁護する論者の間では、内在主義が主流を占めてきた(cf. Fodor, 1980, 1987; Stich, 1983)。これに対して心的状態に関する外在主義とは、ある個体の心的状態はその個体の内的状態だけでなく、それを取り巻く環境の状態にも依存して個別化される、というテーゼである。ただし外在主義は二つの立場に区別することができる。Putnam(1975, 1988)やBurge(1979, 1986)は、ある個体の心的内容は部分的にその環境の状態によって決定される、という「内容外在主義」を擁護した。これに対して近年では、ある個体の心的内容を担う媒体(vehicle)がその環境の状態を含む、という「媒体外在主義」を提唱する論者が現れている(cf. Wilson, 1994; Hurley, 1998; Clark & Chalmers, 1998; Clark, 2008)⁽³⁾。内容外在主義と媒体外在主義は、どちらも心は環境から切り離して研究できないと主張するが、異なる論拠に基づいてそうするのである。

本稿は、内在主義とこれら二種類の外在主義の論争を検討することを通して、心は環境から切り離して研究できるか、という問いに迫る。第1節では、PutnamとBurgeの内容外在主義の論証を紹介する。第2節では、内容外在主義に対するFodorら内在主義者の二つの反論(「科学的心理学の規範からの論証」と「計算主義仮説からの論証」)を検討する。第3節では、内在主義が依拠する前提(知覚と行為の「入力-出力的描像」)に反省を加え、Wilson, Clark & Chalmersらの媒体外在主義がFodorらの反論を回避しうることを確認する。第4節では、媒体外在主義の主要な論拠であるClarkらの「機能主義からの論証」が成功

していないことを示す。最後に、媒体外在主義を巡る議論の方向性について提案を行う。

1. 内容外在主義

1.1 内容外在主義の論証

デカルトの流れを汲む伝統的心理学は、心的状態の個別化は環境の状態に依存しない、という「内在主義」を前提してきた。それによれば、ある個体を取り巻く環境の状態は、その個体の内的状態に相違を及ぼす場合にのみ、その心的状態に相違を及ぼす。従って、同一の内的状態をもつ二人の個体の心的状態は同一である。しかしPutnam(1975)とBurge(1979)は、これが成り立たないと論じる。彼らは、以下で紹介する二つの思考実験によって、心的状態の内容がそれぞれ物理的および社会的環境に依存することを示す⁽⁴⁾。

思考実験 1：双子地球(Putnam, 1975, pp.223-224)

宇宙のどこかに「双子地球」と呼ばれる惑星があると仮定する。地球上で「水」と呼ばれる物質が H_2O という分子構造をもつのに対し、双子地球上で「水」と呼ばれる物質は、 H_2O と見分けがつかないにもかかわらず、XYZという分子構造をもつ。しかしこの一点を除いて、双子地球は地球の正確な複製になっており、双子地球には地球人すべてを細部まで正確に複製した分身が存在する。地球人ピエールと双子地球上の彼の分身（仮に「双子ピエール」と呼ぶことにする）は、ともに「水は透明だ」と信じている。しかし、ピエールの「水」概念が H_2O を意味するのに対して、双子ピエールの「水」概念はXYZを意味するので、両者の「水は透明だ」という信念は内容を異にする。従ってピエールと双子ピエールは、同一の内的状態をもつにもかかわらず、その物理的環境が異なるために、異なる心的状態をもつことになる⁽⁵⁾。

思考実験 2：関節炎(Burge, 2007, pp. 104-106)

腿に炎症を患っているアランは、「自分は腿に関節炎 (arthritis) を患っている」という誤った信念をもっている。ここで、「関節炎」という言葉が関節の炎症だけでなく腿の炎症をも意味するような反事実的状况に、アランと同じ歴史を歩んできた人物（仮に「双子アラン」と呼ぶことにする）がいる、と仮定する。アランの「関節炎」概念が関節の炎症だけを意味するのに対して、双子アランの「関節炎」概念は腿の炎症をも意味するから、両者の「自分は腿に関節炎を患っている」という信念は内容を異にする。従ってアランと双子アランは、同一の内的状態をもつにもかかわらず、その社会的環境が異なるために、異なる心的状態をもつことになる。

Putnam と Burge は、以上の思考実験に基づいて、内在主義を斥け、心的状態の個別化は環境の状態に依存する、と結論する。このように、心的内容が部分的に環境の状態によって決定されることから帰結する外在主義は、「内容外在主義」と呼ばれる。

1.2 内容外在主義と機能主義

Burge(1979)とPutnam(1988)は、内容外在主義に基づいて「機能主義」に反論する。機能主義によれば、心的状態はその因果的役割（機能）によって個別化される機能的状態である。ある心的状態の機能は、感覚入力、行動出力および他の心的状態との因果的結びつきによって特定される⁽⁶⁾。例えば「水が飲みたい」という思考は、「水は透明だ」、「水は無臭だ」、「水は液体だ」といった信念と結び付いて、透明で無臭な液体が入ったコップの刺激を受け取ったときに、そのコップの中の液体を飲むという行動を引き起こすような状態として定義される。

機能主義は、同一の機能をもつような二つの心的状態を、同一の心的状態と見なす。「双子地球」のケースでは、ピエールと双子ピエールの入力、出力、機能的状態はすべて同一である。例えば、彼らが同様に、「水は透明で無臭な液体だ」と信じており、透明で無臭な液体が入ったコップの刺激を受け取って、そのコップの中の液体を飲んだとしよう。機能主義によれば、彼らは同様に「水が飲みたい」と考えていたことになる。しかし Putnam の議論では、「水が飲みたい」という彼らの思考は、異なる内容をもつために、異なる状態であることになる。Burge と Putnam はこの点に基づき、因果的役割による心的状態の個別化は不十分であるとして、機能主義を斥ける。

2. 内在主義からの反論

前節で紹介した内容外在主義は、「常識心理学」と呼ばれるわれわれの日常的な心の理解に一致すると見なすことができる。常識心理学では、われわれの行動は、信念や欲求といった、内容を伴う心的状態を用いて説明される。例えば、わたしが王子動物園に行ったとすれば、この行動は、わたしが「パンダを見たい」と欲求しており、「王子動物園にパンダがいる」と信じていたからだ、と説明される。この場合心的状態がその内容によって個別化されると考えるのは自然であり、内容外在主義はこの考え方に基づいている。

しかし、常識心理学と区別される科学的心理学が、このようなわれわれの日常的な考え方に従わなければならない、とは言えない。そこで内在主義を擁護するためには、外在主義は常識心理学には妥当するが、科学的心理学には適用されない、と論じる道がある。Stich

と Fodor は、科学的心理学一般の規範と認知心理学の仮説に訴えて、認知心理学の方法論としては内在主義を採用すべきである、と主張する。

2.1 科学的心理学の規範からの論証

Stich(1983, chap.8)とFodor(1987, chap. 2)はまず、科学的心理学は一般に行動の因果的説明を目的とするものであり、従って心的状態をその因果的役割によって（あるいはその因果的効力に即して）個別化しなければならない、と主張する⁽⁷⁾。さらにStichらによれば、個体の内的状態のみが行動を引き起こす因果的効力をもつ。言い換えれば、環境の状態は、刺激を通して個体の内的状態に因果的影響を及ぼす場合にのみ、行動に因果的影響を及ぼすのであり、直接には行動の産出に関与しない。以上から、心的状態は個体の内的状態のみによって決定される、という内在主義が帰結する⁽⁸⁾。例えば「双子地球」のケースにおいて、地球と双子地球の間の水の分子構造の違いは、ピエールらに同一の刺激を与えるため、彼らの内的状態に相違をもたらさない。従ってピエールらは、「水が飲みたい」と考えるとき、同じように水を飲むだろう⁽⁹⁾。彼らの思考は、行動の産出において同一の役割を担っていることになるので、同一の思考と見なされなければならない⁽¹⁰⁾。

これに対してBurge(1986)は、生物と環境の関係を説明することを目的とするような心理学理論の存在を指摘して、科学的心理学は一般に行動の因果的説明（のみ）を目的とするというStichらの前提に反論する⁽¹¹⁾。例えば視覚理論は、生物がどうやって環境内の対象を見ることに成功するのか、を説明しようとする。従って、心的状態をその因果的効力に即して個別化することを、科学的心理学一般の規範と見なすことはできない。

しかし以上の議論から引き出すべき教訓は、心的状態の個別化は心理学理論の説明目的に相対的である、ということであるように思われる。すなわち、一部の心理学理論が行動の因果的説明を目的にする限りで、科学的心理学は部分的に因果的効力に即した心的状態の分類法を必要とすると言える。内容外在主義は、心的状態を直接には行動の産出に関与しない環境の状態によって個別化するため、このような分類法を与えない。従って、(Stichらの論証は成り立たないとはいえ)内容外在主義は、心的状態の因果的効力をどうやって説明するのか、という問題（「心的因果」の問題）を抱えているのである。

2.2 計算主義仮説からの論証

Fodor(1980)によれば、認知心理学における計算主義仮説は、「心の表象理論 (RTM: representational theory of mind)」および「心の計算理論 (CTM: computational theory of mind)」という二つのテーゼから成る。RTMによれば、心的状態とは形式的（あるいは統語論的）

性質および意味論的性質をもった表象（記号）に対する関係であり、心的プロセスとは表象に対する操作である。さらに CTM によれば、心的プロセスは表象の形式的性質だけにアクセスできる、という意味で計算的である。言い換えれば、心的プロセスは、真理、指示、意味といった表象の意味論的性質にアクセスできない。（Fodor はこの際、表象の形式的性質が、記号の形のような、表象それ自身の特徴のみによって決定されるのに対して、表象の意味論的性質は環境の特徴との関係に依存する、と考えている。）

Fodor はコンピューター・アナロジーに訴えて CTM を解説する。例えばチューリング・マシンは、テープ上の記号を読み取ってこれを別の記号に書き換える、という仕方で作動する。この際、計算プロセスがアクセスできるのは、これらの記号の形式的特徴だけである。チューリング・マシンは、テープ上に書かれた記号の特徴が環境の特徴を反映しているか否かにかかわらず、同じように作動する。CTM が正しければ、われわれの心的プロセスは、このようなコンピューターの記号操作に類するものと見なせる。すなわちそれは、「表象の意味論的性質に言及せずに特定されるような操作である」（*ibid.*, p.227）。

こうして CTM は、心的状態の個別化に、次の「形式性条件」を課すことになる。

二つの思考が形式的に別個の表象に対する関係と見なされうる場合にのみ、これらの思考は内容において別個でありうる。（*ibid.*, p. 227）

言い換えればこの条件は、心的状態を、それが関係する表象の意味論的性質ではなく、その形式的性質によって個別化することを要求する⁽¹²⁾。Fodor は、これが内在主義を含意する、と主張する。例えば「双子地球」のケースにおいて、ピエールと双子ピエールがともに「水」について考えるとき、彼らの内的状態は同一だから、その思考が関係する表象の形式的性質は同一である。従って彼らの思考は、異なる意味論的性質をもつ（ピエールの思考が H₂O に関わるのに対して、双子ピエールのそれは XYZ に関わる）にもかかわらず、同一の思考と見なされなければならない。

3. 媒体外在主義

Hurley(1998)は、心的内容が部分的に環境の状態によって決定されると主張する「内容外在主義」と、心的内容を担う媒体そのものが環境の状態を含むと主張する「媒体外在主義」を区別している⁽¹³⁾。両者は独立のテーゼであり、前者に対する内在主義陣営からの反論は、後者に対しては妥当しない。媒体外在主義者の内、まず Wilson、Hutchins らは、従来の計算主義心理学が依拠する前提を攻撃し、Fodor の計算主義から内在主義への論証が成り立たな

いことを示す。また、内容外在主義に基づいて機能主義を攻撃するPutnamやBurgeと対照的に、Clark & Chalmersは機能主義に基づいて媒体外在主義を導き出す。

3.1 知覚と行為の入力 - 出力的描像と計算主義

内在主義者は、心は皮膚および頭蓋という生物の境界によって環境から分離されている、と見なしている。Hurley(1998)は、この見方が、「知覚を世界から心への入力、行為を心から世界への出力と見なす」、知覚と行為の「入力 - 出力的描像 (input-output picture)」を前提している、と述べる(ibid., pp. 1-2, 288, 298)。従来の計算主義は、認知システムとしてのわれわれを、刺激を記号に変換する「感覚器」と記号を運動に変換する「効果器」によって境界づけられた情報処理装置と見なす点で、この描像によく適合する。

しかしHurleyは、生物への入力が出力に変化をもたらすだけでなく、生物からの出力がそれに続く入力に連続的で複雑な変化をもたらすことがある、という点に基づいて、知覚と行為は入力 - 出力的描像が考えるよりも緊密に相互依存している、と論じる⁽¹⁴⁾。この際、出力から入力への「力学的フィードバック」の一部は生物の内部で行われるが、一部は環境の内部で行われる(ibid., pp. 2, 307, 333)。従って、環境内で行われる行為を単なる認知プロセスの結果と見なすべきではない。むしろこのような行為は、認知プロセスにおいて決定的な役割を担っている場合がある。よく知られた例では、われわれは「 123×456 」といった複雑な問題を、ペンと紙を用いた筆算によって解く。この際われわれは、まず「 3×6 」を計算して「18」と書きとめ、次に「 2×6 」を計算して「12」と書きとめる、という仕方で問題を解く。こうしてわれわれは、環境の操作によって、複雑なタスクをより単純なタスクの系列に還元することができる(cf. Rumelhart, Smolensky, McClelland & Hinton, 1986)。

Wilson(1994)は、紙とペンを用いて計算を行なっているときのわれわれが、個体の境界を越えてその環境の一部を含んだ「広い (wide) 計算システム」の一部である、と主張する(ibid., pp. 355-356)。Wilsonはこの際、Fodorの計算主義から内在主義への論証が成功していないことを示す。Fodorは、計算主義からの論証において、心的状態が心的表象の形式的性質によって個別化されるような計算的状态であるという前提から、心的状態が個体の内的状態のみによって決定されるという結論を導き出す。Fodorはこの際、表象の形式的性質を、記号の形のような、その内在的性質（表象それ自身の特徴のみによって決定される性質）と見なしている。しかしWilsonによれば、表象の形式的性質とは、それが記号を規則に従って操作するような形式的システムの部分である限りでも性質である。これが正しいければ、計算的状态がどのような内在的性質をもつかは任意である。従って、心的状態が計算的状态であるとしても、それを含む形式的システムが個体の境界内に位置しない限

り、心的状態が個体の内的状態のみ依存することは帰結しない。こうして、筆算を行なっているときのわれわれのように環境の一部を含んだシステムも、記号を規則に従って操作する限りで、計算システムと見なすことができる。

人間を感覚器と効果器によって環境から分離された情報処理装置と見なすコンピューター・アナロジーの根拠としては、しばしば「コンピューターは人間をイメージして作られた」(Hutchins, 1995, p. 356)ということが挙げられる。これに対して Hutchins は、コンピューターは人間そのものではなく、「抽象的記号の形式的操作」をイメージして作られたのであり、このような記号操作を行っているのは、環境内の記号およびそれと相互作用する人間から成る「社会文化的システム」である、と反論する(ibid., pp. 363-364)。Hutchins によれば、従来の計算主義はこの点を取り違え、コンピューターをイメージして人間を再解釈してきたのである。これが正しければ、認知システムとしてのわれわれが情報処理装置であるとしても、操作される記号は環境内にあるので、人間と環境の間には、刺激を記号に変換する感覚器や記号を運動に変換する効果器のような境界は介在していないことになる。

3.2 媒体外在主義と機能主義

Clark & Chalmersは、次の思考実験に訴えて、媒体外在主義を導き出す⁽¹⁵⁾。

思考実験 3：記憶障害(Clark & Chalmers, 1998, pp. 12-13, 14)

(a) インガは王子動物園にパンダがいると聞き、「パンダを見に行こう」と決意した。彼女は記憶を探って「王子動物園は神戸にある」ということを思い出し、神戸に向かった。

(b) オットーは記憶障害を患っている。彼はいつもメモ帳を携帯しており、新しい情報を得ればそれに書き込み、古い情報が必要になればそれを調べる。オットーは王子動物園にパンダがいると聞き、「パンダを見に行こう」と決意した。彼はメモ帳を調べて「王子動物園は神戸にある」という記述を見つけ、神戸に向かった。

(c) オットーの分身である双子オットーは、オットーと同様に記憶障害を患っており、いつもメモ帳を携帯している。ただしオットーのそれと異なり、双子オットーのメモ帳には、天王寺動物園と王子動物園を取り違えて「王子動物園は大阪にある」と書き込んである。双子オットーは王子動物園にパンダがいると聞いて「パンダを見に行こう」と決意し、メモ帳を調べてこの記述を見つけ、大阪に向かった。

まず Clark らは、(a)と(b)の比較により、個体の心的状態がその環境の状態を含む場合があることを示す。インガは、記憶を探ってそのことを思い出す前から、「王子動物園が神戸

にある」と信じていたと言える。オットーはこのような記憶をもたないが、彼にとってメモ帳は、神戸に行くという行動に至る認知プロセスにおいて、インガにとって記憶が演じているのと同じ因果的役割を演じている。Clarkらはここで、次のように述べる。

ある情報を信念と見なされるものにするのはそれが演じる役割であり、これに関連する役割が身体の内側からしか演じられえない理由はない。(ibid., p. 14)

これは、心的状態をその因果的役割によって個別化する機能主義に依拠していると見なせる。それによれば、「王子動物園は神戸にある」というオットーのメモ帳の記述は、「王子動物園は神戸にある」というインガの記憶と同様に信念であり、オットーはメモ帳を調べる前からこのことを信じていた、と見なせる。Clarkらはこのようにして、心的状態（のあるもの）は皮膚と頭蓋の境界を越えて環境の一部を含む、と主張する。

さらにClarkらは、(b)と(c)の比較によって、自分たちの立場とPutnamやBurgeの立場の違いを示す。オットーと双子オットーは同一の内的状態をもつが、オットーが「王子動物園は神戸にある」と信じているのに対して、双子オットーは「王子動物園は大阪にある」と信じている。この思考実験は、Putnamらの思考実験と同様に、心的状態は個体の内的状態のみによっては決まらない、という結論に導く。しかし、Putnamのケースでは、ピエールと双子ピエールが生み出す行動は（物理的に）同一であるのに対して、Clarkらのケースでは、オットーと双子オットーは異なった行動を生み出す。ここから、「双子地球」のケースでは、水の分子構造という環境の特徴が認知プロセスにおいて何の役割も演じていないのに対して、「記憶障害」のケースでは、メモ帳という環境の特徴が認知プロセスにおいて「積極的 (active) な役割」を演じていることが分かる(ibid., p. 14)⁽¹⁶⁾。すなわち、オットー（および双子オットー）とメモ帳は因果的に相互作用して一つの認知システムを形成し、メモ帳はこのシステムの行動の産出に直接に関与している。従って、メモ帳の記述を信念と見なすことは、因果的効力に即した状態の個別化であるため、Clarkらの媒体外在主義は、内容外在主義の抱える心的因果の問題を回避できる。

4. 機能主義からの論証の問題

本節では、媒体外在主義の主要な論拠である Clark & Chalmers の機能主義からの論証が成功していないことを示す。議論の要点は、以下の二つである。第一に、機能主義的な状態の個別化は状態の機能をどのような仕方で特定するか依存しており、媒体外在主義を支持するような機能特定の基準は得られない。第二に、「記憶障害」のケースで）メモ帳

の記述を信念と見なすような状態の個別化には説明上の利点がない。

従来の機能主義者は、心的状態の機能を特定するための基準として、常識心理学と科学的心理学（認知心理学）のいずれかを採用してきた。後者に従って状態の機能を特徴づけるならば、「記憶障害」のケースにおいて、オットーのメモ帳は、インガの記憶がもつような心理学的特徴を欠くことから、それと同等の機能を担っているとは見なせない、と言える(cf. Rupert, 2004)⁽¹⁷⁾。これに対してClark(2008)は、ある状態が心的であるか否かは、科学的心理学が特定する「きめ細かな」機能ではなく、常識心理学が特定する「きめの粗い」機能によって決めるべきである、と論じる。すなわち、前者によってこれを決めれば、例えば人間の記憶がもつ心理学的特徴を具えていない生物の記憶を心的と見なさないような、排他的態度に陥る危険がある(ibid., sec. 5.3, 5.5)。

Clark は、常識心理学が、脳内にあるもののみを心的と見なす「神経中心主義 (neurocentricism)」を前提しない限り、オットーのメモ帳の記述を信念と見なすことに反しない、と主張する(ibid., sec. 5.9)。しかしこれは疑わしい。と言うのは、常識心理学は知覚と行為の間にあるもののみを心的と見なす知覚と行為の入力 - 出力的描像を暗黙に前提していると考えられるからである。これに従えば、オットーはメモ帳を調べるために、行為（それに手を伸ばすこと）と知覚（その記述を見ること）を必要とするため、その記述は信念と見なせないことになる(cf. Butler, 1998)。これに対して Clark (2008)は、メモ帳の記述を見ることは、オットーとメモ帳から成るシステムにとっては、知覚ではなく内観と見なせる、と反論する(ibid., sec. 5.7)。しかしこの戦略は、知覚と内観がどのように区別されるか、という問題を生じる。常識心理学に従う限りは、これを知覚と見なさざるをえないだろう。

媒体外在主義者は、知覚と行為の間にあるもののみを心的と見なすことを（神経中心主義と同様の）偏見として斥ける、という戦略を採ることもできる。しかしいずれにせよ、以下で示すように、メモ帳の記述を信念とは見なすことには説明上の利点がない。

オットーの行動は、メモ帳の記述を信念と見なさなくても説明可能である。すなわち、オットーが神戸に行ったのは、彼が「王子動物園に行こう」と決意し、「王子動物園がどこにあるかはメモ帳に書いてある」という信念をもっていたためメモ帳を調べ、「王子動物園は神戸にある」という信念をもったからだ、と説明できる。この場合、オットーはメモ帳を調べるまで「王子動物園は神戸にある」という信念をもっていなかったことになる。

これに対して Clark らは、説明の単純さという観点から、メモ帳の記述を信念と見なす方が妥当である、と反論する。すなわち、インガの行動も、彼女は「自分は王子動物園がどこにあるか覚えている」という信念をもっていたため記憶を探り、「王子動物園は神戸にある」ことを思い出した、と説明できる。しかし、このような説明は不必要に複雑である。

オットーのメモ帳は、インガの記憶と同様に自動的にアクセスされるため、彼はメモ帳を調べる前から「王子動物園は神戸にある」と信じていたと見なせる。従ってインガの場合と同様に、オットーが「王子動物園がどこにあるかはメモ帳に書いてある」と信じていたためにメモ帳を調べたと考えることは、彼の行動の説明を不必要に複雑化することになる(Clark & Chalmers, 1998; Clark, 2008, sec. 4.8)。

しかし、Clarkらの反論は成功していない。第一に、インガのケースとオットーのケースの説明上のアナロジーは成り立たない。なぜなら、インガは記憶を探るために「自分は王子動物園がどこにあるか覚えている」と信じている必要がないのに対して、オットーはメモ帳を調べるために「王子動物園がどこにあるかはメモ帳に書いてある」という信念を必要とするからである(cf. Fodor, 2009)⁽¹⁸⁾。オットーのメモ帳へのアクセスは、この点で十分に自動的ではない。第二に、メモ帳の記述を信念と見なすことは、そう見なさないことに比べて、説明力の点で劣る。すなわち、オットーがメモ帳を調べる前から「王子動物園は神戸にある」という信念をもっていたと考えれば、なぜ彼はメモ帳を調べたのかが説明できない。これを説明するためには、オットーは「王子動物園がどこにあるかはメモ帳に書いてある」という信念だけをもっていた、と考えることが必要になる(cf. Chalmers, 2008)⁽¹⁹⁾。この場合、行動説明は複雑になるが、インガのケースと異なり、オットーのケースでは、このような複雑さは必要なものと考えられる。以上から、オットーのメモ帳の記述を信念と見なすことは妥当でない、とすることができる。

結論

本稿は、内在主義と外在主義の論争を概観することを通して、二つの外在主義の議論の成否を検討してきた。一方で内容外在主義は、行動の因果的説明のために要求されるような、因果的効力に即した心的状態の分類法を与えることができない、という問題を抱えていた。他方で、媒体外在主義はこの問題を回避できるが、本稿はClark & Chalmersの機能主義から媒体外在主義への論証が成功していないことを示した。

最後に、媒体外在主義を巡る議論の方向性が、心理学や認知科学の研究において環境を考慮することの重要性を評価する上で、ミスリーディングである、という点を指摘したい。Clarkらは「記憶障害」という非日常的な事例に訴えるが、これはなぜわれわれが認知タスクの遂行において環境を操作するのを見えにくくしている。筆算のような日常的な事例では、われわれが環境を操作するのは、それなしでは遂行困難な認知タスクを容易に遂行するためであると考えられる。この際、生物がどうやって認知タスクの遂行に成功するかを説明するという目的に照らして見れば、関連する環境の状態が認知プロセスにおいて

生物の内的状態とは異なる役割を担っていると見なすのは自然だが、このような環境の状態が説明上重要な役割を担っていることに疑いはない。

こうして見ると、認知プロセスにおいて環境の一部が積極的な役割を担っている、という媒体外在主義のアイディアは、環境の一部が文字通りの意味で心的状態と見なせるか、という観点からよりも、環境の一部を含んだシステムを研究することの有望さ、という観点から評価されるべきであるように思われる。すなわち、議論すべき実質的な問題は、このようなシステムを研究することにどのような利点があるか、このようなシステムの振る舞いを説明する認知科学の理論的枠組みは存在するか(例えば Wilson の「広い計算主義」はこのような理論として有望か)、といった点にあるだろう。

註

- (1) 「内在主義／外在主義」は、「個体主義／反個体主義」とも呼ばれる。
- (2) 本稿で「個別化」と言うときには、個々の状態トークンを特定の状態タイプへと分類する「タイプ個別化」を意味する。例えば、二人の異なる人物の「水が飲みたい」という二つの異なる思考トークンは、(少なくとも両者が同じ環境にいるならば) 同一の思考タイプに分類される。
- (3) 「内容外在主義／媒体外在主義」という呼称は、Hurley(1998)に従った。
- (4) 正確には、心的状態はその態度と内容によって個別化される。例えば「王子動物園にパンダがいる」と考えることは、その態度に関して、王子動物園にパンダがいるかどうか疑うことや、王子動物園にパンダがいてほしいと望むことと区別され、その内容に関して、「王子動物園にキリンがいる」と考えることや「天王寺動物園にパンダがいる」と考えることと区別される。
- (5) Putnam(1975)の議論は本来、言葉の意味がそれを使用する個人の内的状態のみによっては決定されないことを示そうとするものだが、その論点は信念の内容にも適用できる。
- (6) 機能主義は、心的状態が様々なタイプの物理的状态(脳状態以外のものを含む)によって実現可能であることを認める。Clark & Chalmers(1998)の媒体外在主義の論証は、この点に多くを負っている。
- (7) 正確には、Stich(1983)は、科学的心理学は行動説明を目的とすると主張し、Fodor(1987)は、一般に科学は事物の因果的説明を目的とする、と主張している。
- (8) Stich(1983)はこのテーゼを「心理学的自律性 (psychological autonomy) の原理」と呼ぶ。それによれば、「心理学者が関心をもつべき状態やプロセスは、生物の現在の内的物理的状态に付随 (supervene) する状態やプロセスである」(ibid., p.164)。
- (9) この点は、ピエールらは入れ替わっても同じ行動を生み出す、ということによって示される(cf. Stich, 1983, pp. 165-166)。例えばピエールと双子ピエールが、誰かの悪戯で、互いの位置へ一瞬の内にテレポートさせられたとする。両者が「水は透明で無臭の液体だ」と信じており、「水が飲みたい」と考えるならば、双子ピエールは、透明で無臭な液体が入ったコップの刺激を受け取ったとき、その液体は彼が「水」と信じるもの(XYZ)ではないにもかかわらず、ピエールと同様にそのコップの中の液体を飲むだろう。
- (10) 心的内容は環境の状態に依存するため、因果的役割を演じないと考えられる。ここから Stich (1983, chap.8)は、科学的心理学において心的内容の概念を使用すべきでない論じる。これに対して Fodor (1987, chap.2)は、環境の状態に依存する「広い (broad) 内容」と区別して、個体の内的状態のみによって決定される「狭い (narrow) 内容」の使用を認める。
- (11) またBurge(1986)は、ピエールと双子ピエールが示す行動は同一であるという前提に対して、次のように反論する。心理学において行動は、意図的な行為として個別化されなければならない。ピエールらが水を飲むとき、ピエールがH₂Oを飲むと意図するのに対して、双子ピエールはXYZを飲むと意図するので、彼らの行動は異なると見なさなければならない。
- (12) Fodor(1980)はこのテーゼを「方法論的独我論 (methodological solipsism) の仮定」と呼ぶ。ただし、これは本来 Putnam(1975)が定式化したテーゼであり、それによれば、「厳密にそう呼ばれるところのいかなる

心理学的状態も、その状態が帰属される主体以外のいかなる個体の存在をも前提しない」(ibid., p.220)。

(13) 内容外在主義は心的状態タイプがどのように分類されるかに関わり、媒体外在主義は心的状態トークンがどこに例化されるかに関わる(cf. Hurley, 1998)。内容と媒体は、例えば「パンダが見たい」という同一の内容が、紙に書かれた文、口に出された発話、頭の中で思い浮かべられた思考、といった異なる媒体によって担われうる、という仕方で区別される。

(14) Hurley(1998, chap.9)は特に、知覚内容が入力の変化を介さず直接に出力の変化から影響を受けることを強調する。例えば「眼球麻痺 (paralyzed eye)」と呼ばれる現象では、眼球の筋肉を麻痺させた状態で被験者が眼球を横へ動かそうとすると、網膜への入力も固定されているにもかかわらず、被験者は世界が横へ移動するような経験をもつ。

(15) Clark & Chalmers(1998)の媒体外在主義のテーゼは、信念のように非意識的で非生起的な心的状態 (の一部) に適用される。彼らは特に、意識経験は環境に拡張されない、と論じている。

(16) この観点から Clark & Chalmers(1998)は、Putnam と Burge の立場を「消極的 (passive) 外在主義」、自分たちの立場を「積極的外在主義」と呼ぶ。後者は、「拡張した心 (extended mind) 仮説」とも呼ばれる。

(17) Rupert(2004)は、内的な心的状態およびプロセス (学習や記憶) にしか見出されない心理学的特徴の例として、先行する学習が後続する学習を妨げる「負の転移 (negative transfer)」などを挙げている。

(18) Fodor(2009)は、インガが「王子動物園が神戸にある」ということを思い出すために「自分は王子動物園がどこにあるか覚えている」と信じている必要があると考えれば、無限後退に陥る、と指摘する。

(19) Chalmers(2008)は、なぜオットーがメモ帳を調べたのかを説明するためには、メモ帳の記述は信念と見なせないが、なぜオットーが神戸に行ったのかを説明するためには、これは信念と見なせる、と論じる。しかし、メモ帳の記述を信念と見なさなくてもなぜオットーが神戸に行ったのかは説明できるので、Chalmers が提案するようなアド・ホックな個別化を敢えて採用する動機は乏しい。

文献

- Burge, T. (1979). 'Individualism and the mental', reprinted in T. Burge (2007), pp.100-150.
 ——— (1986). 'Individualism and psychology', reprinted in T. Burge (2007), pp.221-253.
 ——— (2007). *Foundations of Mind: Philosophical Essays, Volume 2*, New York: Oxford University Press.
 Butler, K. L. (1998). *Internal Affairs: Making Room for the Psychosemantic Internalism*, Dordrecht: Kluwer.
 Chalmers, D. (2008). 'Foreword', in A. Clark (2008), pp.iv-xxix.
 Clark, A. (2008). *Supersizing the Mind: Embodiment, Action, and Cognitive Extension*, New York: Oxford University Press.
 Clark, A. & Chalmers, D. (1998). 'The extended mind', *Analysis* 58, 10-23.
 Fodor, J. A. (1980). 'Methodological solipsism considered as a research strategy in cognitive psychology', reprinted in J. A. Fodor (1981), *Representations: Philosophical Essays on the Foundations of Cognitive Science*, Cambridge, MA: MIT Press, pp.225-254.
 ——— (1987). *Psychosemantics: The Problem of Meaning in the Philosophy of Mind*, Cambridge, MA: MIT Press.
 ——— (2009). 'Where is my mind?', *London Review of Books* 31(3), 13-15.
 Hurley, S. L. (1998). *Consciousness in Action*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
 Hutchins, E. (1995). *Cognition in the Wild*, Cambridge, MA: MIT Press.
 Putnam, H. (1975). 'The meaning of meaning', reprinted in H. Putnam (1975), *Mind, Language, and Reality: Philosophical Papers, Volume 2*, New York: Cambridge University Press, pp.215-271.
 ——— (1988). *Representation and Reality*, Cambridge, MA: MIT Press.
 Rumelhart, D. E., Smolensky, P., McClelland, J. L. & Hinton, G. E. (1986). 'Schemata and sequential thought process in PDP models', in D. E., Rumelhart, J. L. McClelland & the PDP Research Group (eds.), *Parallel Distributed Processing: Explorations in the Microstructure of Cognition, Volume 2: Psychological and Biological Models*, pp.7-57, Cambridge, MA: MIT Press.
 Rupert, R. D. (2004). 'Challenges to the hypothesis of extended cognition', *Journal of Philosophy* 101, 389-428.
 Stich, S. (1983). *From Folk Psychology to Cognitive Science: The Case against Belief*, Cambridge, MA: MIT Press.
 Wilson, R. A. (1994). 'Wide computationalism', *Mind* 103, 351-372.